
密航 その2

たかどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

密航 その2

【Nコード】

N8890K

【作者名】

たかどん

【あらすじ】

運び屋が、相方と出会い、ある国へ行く事になります。

一話目（前書き）

短編からの続きです。短期連載として終わらせようと画策しています。よろしくお願いします。

一話目

いわゆる場末の酒場という奴だろう。

週末の夜だというのに客が数える程しか居ない。

「何それ？ マツコリ？」

俺がカウンターで人待ちしながらちびちびグラスに口をつけていると、いつからいたのか、隣の席で一人の女が艶やかな黒髪を手櫛で梳きながらこちらを見ていた。

俺と同じ年かやや上にも見える。顔立ちと言うより表情が大人びているのだ。

妖艶とも違う。冷徹とでも言おうか。

メリハリのある体のラインが際だつライダースーツは、橙色の照明に反射し妙になまめかしい。

「……………牛乳」

俺は女を横目でちらりと見やり、数瞬悩んだ後答えた。

「……………は？ 何、韓国ではやってるジョークなの？」

女は一瞬目を見開いたが、すぐに元の表情に戻った。

「下戸なんだ」

「ふうん……………」

女は疑わしそうな目つきで俺を見やった後、突然俺のグラスに手を伸ばし、その中身を一口。

「何すんだ。金欠なのか？」

しかし、女は俺の言葉には反応せず、しばらく黙考したあと「席移動するわよ」と勝手にテーブル席の方へ行ってしまう。仕方なく俺は後を追った。

テーブルを囲うように黒塗りの板が張っており、プライベートな会話もストレス無く出来そうだ。

「まさか本当にミルク飲んで待ってる男が居るなんて、思わなかった」

女の体面に座ると、呆れたような口調でそう言われた。

「あらかじめ黒田から聞いてただろ？」

黒田とはなじみの仲介屋の一人だ。

「……………あんた童貞でしょ」

「はあっ！？ お前、いきなり何言って」

女は俺を無視してさらに話を進める。

「その童顔に酒も呑めない、たばこも吸わないなんて、ジャパニーズヲタクって奴なんじゃないの？」

「お前勝手に人を妙なカテゴリーに当てはめるな。っつーかヲタクなら全員童貞だとしても言いたいのか」

「じゃあ素人童貞？」

「そう言うこと言ってるじゃねえよ……………」

俺はカウンターから持ってきた牛乳に口をつける。それは先ほどまでと風味を変えていて、俺はどきりとしてしまう。

「ぷ……………く、あはははははは」

俺の対応の何が面白かったのか女は大笑いする。笑い方はどちらかと言うと悪女のそれだ。

「あはははは……………ごめんごめん。まさか間接でってそこまで初心とはね」

俺が睨んでいる事に気がついていたクセにようやく笑い終えた女は、再び早着替えのような速度で真顔に戻る。

「大体、俺がその……………そうであろうと、仕事に影響はねえだろ」

「果たして、そうかしら」

「……………で、お前が鉄子で良いんだろ」

俺はこれ以上の被害を避けるために、無理矢理本題に入る。

「ええ、鉄子姉さんって呼んで貰って構わないわよ。サンタ君」

「年なんてさしてかわらねえだろ」

「経験の差って奴よ」

「運び屋としてか」

「女としてね」

「俺は男だ」

「それじゃあ人として」

「分かったよ鉄子おばさん」

舐められる事などよくある。特に欧米人に比べ日本人は幼く見られがちで、積荷や他の運び屋はそれだけで俺を見下す。だからいつもなら、軽く流せる程度だったかも知れない。

しかし今はある出来事のせい、軽口と分かっている、反発してしまう。

まるで本当のガキだ。

「あんた、私の殺すリストに載ったわ。まあそれはともかく、お兄さん！ ビール大ジョッキで」

「おまつ！ バイクで来たんだろっが」

「夜には駅前のタクシーすら無くなるこんな田舎で、足の確保は当然でしょ」

しかしアルバイトらしき男も女性には甘いのか、それとも適当なのか特に異論を唱えることもなく注文を取った。

冷えて曇ったジョッキになみなみと注がれたビールが届くと、女……鉄子は一気に半分ほど飲み干した。

「あんた馬としてはベテランなんでしょ」

鉄子は顔色一つ変えずに切り出す。

運び屋家業を馬というのは、鉄子がアジア圏で仕事をしていたからだろう。

「別に、五年かそこら、運良く生き延びたっただけだ」

「何言ってんの。捕まれば昔と違って命の危険も伴うこの仕事で、五年も生き残れば十分にベテランよ。最初の走りで捕まる間抜けが圧倒的に多いんだから」

「そりゃどうも」

「犯罪者ってけなしてるのよ」

「そりゃどーも兄弟。時代が変わってから、理知的な人間を運ぶ事が多くて助かってるよ」

貧しい国から富める国へという従来の密航が終わった訳ではない。

しかしいつの間にか運び屋の世界はステップアップが可能となつたらしい。

密航屋のベテランになる、つまり信用されれば、どこかの誰から『第二世代』を運ぶよう依頼が来るようになる。

当然の事ながら、貧しい国の人間から金をせしめるよりも、国から潤沢な資金を与えられ『戦略兵器』を運ぶ方がよほど金になる。

ただし、捕まったとき待っているのは当然拷問の末の死しかない。

俺がなぜ密航屋からステップアップしたのかは、色々複雑な事情があるのだが、まだ依頼されれば『人間』を運ぶ事もある。

「さて、今回はいつもの様にただ運ぶ訳じゃないわ」

鉄子は急に話題を変える。俺としては願ったりだ。

「民族大移動の手伝いでもするのか？」

黒田から聞いた報酬の額は、百人『人間』を運ばうともまだ得られない程の報酬だった。

「そこである人物と落ち合つて、日本を経由してある国へ届ける」

そう言いながら、鉄子はポケットから旅券に査証、チケットを取り出しテーブルの上に置く。

チケットを見れば『そこ』が何処なのかは分かるのだが。

「その言い方だとたった一人を運ぶだけで良いのか？」

「ま、そう言うこと。それ以上のことは今は言えない」

そう言われてしまえば従うほか無い。今回の主導権は鉄子の方にある。

「何で実年齢より五歳も下になってんだ」

それとは別に気になっていた事を聞く。

「若い方が疑われずに済むかもよ？　っていつかそっちの歳の方が自然でしょ。はい、チケット。それじゃあ、第一ターミナルだから間違えんなよ」

最後に航空券を置くと、言うが早いか、鉄子は早々に立ち上がる。

「って明日かよ!!!？」

「早く寝ないと寝坊しちゃいますよー？」

「いや、もっと準備期間をだな」

「善は急げっていうじゃない」

「お前さっき走りは悪だったつつってたら」

「じゃあね。おやすみ」

俺の言葉を見殺し鉄子は危ない足取りでそのまま店から出て行く。

しばらく呆然とした後、俺は気がついた。

「あの女、金払わねえで行きやがった……………」

仕事が始まろうとしている。

「自殺か殺人の斡旋……………」

この仕事を終わらせたら、別の仕事を見つけよう。それだけの金が入るのだから。

俺はそう決意した。

二話目

いつか痔になる。

例え八時間かかるフライトだとしても、窓際に押し込められた状態では、となりの人間にいちいちお願いしなければ席を立つことも出来ない。

「なあ」

俺は、隣の席で手鏡と睨めっこしている女に話しかける。

「通りたいんだが」

「ここを通りたければ私を倒してから行け」

しかし、俺の要望に女は果てしなく面倒そうに答えるだけ。

「いやマジで」

「俺の屍を越えていけ」

本当に殺したろうかと思う。こいつは面白がっているのが表情にでないから余計腹が立つ。

女の名前を鉄子（偽名）と言う。それ以外の呼び方は「おい幸子、退きなさい」くらいだ。

「やーよ智則さん。忙しいんだもの」

良いながら、眉毛を妙な道具で描いていく。

寝坊するなどか言いつつ、自分が寝坊して化粧も出来なかったらしい。

ちなみに智則というのは俺の今回の名前。鉄子は幸子というマイナーチェンジを経た訳だ。

鉄子は現在長い髪をうなじあたりで結わえている。

格好はタートルネックのセーターにジーンズと若奥様風だった。

現地に着いたら何重にも武装しなければならぬ事を考えると、俺はややげんなりした。

『戦略兵器』の運びは『人間』と違い面倒な面と楽な面を併せ持つ。

そも貧しい国の人間は航空券を買うことさえまならず、もっとも難しいのは先進国に向けて搭乗するまでだといえる。

旅券の真贋を確かめられることすらある。

それに比べ俺が経験してきた『戦略兵器』の運びは主に先進国の住人を運ぶ事が多い。そのため比較的楽だった。

そう、少し前までは楽だったのだ。

しかし最近では空港内に探知型能力を持つ第二世代が常駐する。

彼等は人種で探知の手をゆるめると言うことをしない。こちらの手口も分かれているのだ。

さらに面倒な点は賄賂が使えないという点。

『人間』の運びは実に様々な者への賄賂を渡す事によって成功する確率が高まる。

というか息のかかったエアライン職員、イミグレーションオフィサー、空港警察などの勤務シフトが一致して始めてGOサインが出される事が当たり前といっても良い。

しかしいわば『テロリスト』とも言える無用な戦争の火種にもなりかねない『戦略物資』の運びに関して協力をしてくれる者は少ない。

国によっては死刑になる可能性もあるからだ。

「ねえ」

ふいに隣から声をかけられる。

「ついたみたいね」

鉄子は大きく伸びをしながら、そう言った。

こいつはさっきまで快眠してやがったのだ。

そのせいで、俺はなぜだか妙に落ち着かず、位置的にトイレに立つ事も出来なかった。

「さて、歓迎してくれると良いんだが」

「日本人は何処でも歓迎されるものよ。歓迎する相手の善悪は問わずにね」

飛行機が高度を落としていく。

日差しは強く、窓からは何処までも青い空が続く。

眼下には広大な飛行場。駐車されている車などおもちゃにしか見えない。

「独裁国家……………ねえ」

「今は違っわ」

鉄子に目を移すと、相変わらずの鉄面皮に、しかし憂いのような物がかいま見えた気がした。

「さて、まずは宿か？」

「何言ってるの。足に決まってるでしょう」

「いや、もうすぐ日暮れだろう。この季節だと後二時間も持たねえぞ」

確か午後四時過ぎには、もう闇が訪れるのではなかったか。

「昨日も言っただでしょう。善は急げって」

俺は寝れなかったから感覚的には昨日だったの。

空港に到着し、問題なく入国審査も済ませ無事外へ向かう。

駐車場に出た瞬間、寒気を覚える。今日は日照りが良いため、それほどではないのだろうが、日が落ちたらどうなるんだろうか。

全身重武装でも野宿とかになったら凍死は確実だろう。

寒さと同時に異国の香り、それも一度も訪れたことのない場所で覚える特有の感覚が訪れる。

「飲む？」

そう言っただけでは涼しい顔の鉄子が蒸留酒を勧めてくる。

先ほどとは違いダウンコートにニット帽などと着込んでいた。

「あのな……。つか、ついてきちゃったけど、ただの駐車場じやねえか。車を借りに行くんじゃないのか」

と俺の言葉をまたしても無視し、鉄子は広大な駐車場を眺め回したあと、小走りでハマーのようなでかい車に近づき――。

「よっ」と

懐から出した二本の工具を使いドアの鍵を開ける。

「よし、足確保―」

「確保―、じゃねえ!!―!」

「何よ。レンタカーなんて痕跡残したくないでしょ?」

「いや、そうじゃなくてだな」

「まあ、そこまで反対なら良い子ちゃんは徒歩で来てね。待つてるわ」

鉄子は運転席に乗り込むと手招きする。

「ほら乗るの? 乗らないの?」

確かに俺は運び屋で、犯罪者だ。だが自分の仕事以上の罪を犯したいとは思わない。

しかし、冗談でなく鉄子は車のエンジンをもかける事に成功すると、俺を置いて去っていかうとする。

「って、待てい!」

俺は慌てて走って追いつくと助手席へ転がり込む。

「あら、やっぱり乗るんだ」

「ぜえー、はあー」

俺に答える余裕など無い。

背もたれに倒れ込むようにして、息を整えた。

「あ、そうだ。ちょっと携帯貸して」

「は？」

「持っていないの。連絡取りたくてね」

「……………わあっ たよ」

俺は懷から携帯を出し、鉄子に渡す、と。

あろう事か鉄子は車の窓を開き俺の携帯を前方に放り投げると、数トンはあろう車のタイヤで轢きやがった。

「お前なにするだー！ー！ー！」

「今回の走りには必要ないわ」

「だったら先に言え！ 機種変したばっかだっつーの！ー！」

「忘れてた」

舌を出して軽く謝られる。

いつか殺してやる。

それからのことはあまり思い出したくない。

しかし一つ言えるのはその日は車の中で寝たという事だけだ。

エンジンかけっぱなしの暖房全開でも、明日には生きてないかも、とすら思った。

しかし幸いだったのは、機内で眠らなかったために、早々に意識が無くなったことだ。

そして翌朝、再び車で数時間走ってついた場所は、静かな田舎町といった風な場所だった。

「観光客もここまでは足を伸ばさないからね」

赤い煉瓦を積まれた、統一された造りの家々が建ち並び、路駐や標識さえなければ、近世などにタイムスリップしてしまったかと錯覚する程に綺麗な街だった。

ひび割れた壁は、逆に時代を感じさせてくれる。

「独裁国家って言うっても、国民は幸せだったらしいわ」

「やけに肩入れすんだな」

「まあね」

鉄子はそれきり黙り込んでしまった。

まあ俺としても、お話がしたいのではなく、仕事をさっさと済ませたいのだから問題はない。

路駐し、しばらく歩くと、鉄子が一軒の家の前で立ち止まる。

そしてノックを断続的に行う。

すると、扉が開いた。

扉を開けた主は影でよく見えなかったが、鉄子は何事かこの国の言葉で語りかけると、どうやら中へ招き入れてくれた。

中は外観ほど古くはなく、白壁に窓からの明かりが反射し、淡く部屋を照らしていた。

絨毯を土足で踏むというのはどうにも抵抗があるのだが、気にしてもしょうがない。

室内は妙なアジトということもなく、生活感溢れるこじんまりとした物だった。

招き入れてくれた人物は老婆だというのに背は俺と同じくらいあり、やや曲がった背筋で部屋の奥へと消えていった。

「まさかあの婆さんが積荷とは言わねえだろうな」

「そのまさか」

「マジで!？」

「なわけないでしょ」

そんな無為な会話を続けていた時、先ほど老婆が消えた扉から、再び顔を出す。

そして鉄子に向かって何事かを告げる。

「行きましょう」

鉄子にそう言われ、共に奥へ入る。

個人の部屋らしきそこには。

「その子が私達の積荷」

年端もいかない少年が、立っていた。

身長は俺の腹くらいまでだろうが、背筋はぴんと伸びているため、随分長身に見える。

ふっくらとした頬とは裏腹に、細くつり上がったまなじりで、瞳は翠玉のよう。

ニット帽を被っている脇から除く髪はプラチナブロンド。

全身から放たれるオーラは庶民のそれには思えない。

職業柄様々な人物を見るものの、そのどれとも違った。

妙な少年だと思った。

「p@l^!% \$”& a m p ; ,」

その少年は随分と張りのある声で、何事かを言ったが、俺にはさっぱり分からなかった。

鉄子もそれに答えると、少年に近づく。

二人はしばし会話したのち、おもむろに少年が俺へ視線を移すと。

「貴様のような子供は要らない。テツコさえいれば良い」

「って日本語しゃべれるんかい！」

「それくらい当然だ。だから貴様の力など必要ないと言っている。いつまでそこにいる。さっさといね」

訂正、妙な子供じゃねえ。

文句を言おうにも『戦略兵器』ともすれば、妙な気をおこされただけで、俺など木っ端微塵にされてしまうのだろう。

しかし。

「うるせえクソガキ。お前は黙って俺に運ばれてりゃいいんだよ」

しかし、こちららも舐められる訳には行かない。

「今、なんと言った」

ガキの瞳がさらに輝きを増す。

「黙れつつたんだ。聞こえなかったか？」

「この、不心得者……………」

随分尊大な口調で反論される。

正直心拍数は増大している。このまま睨み合いが続けば、俺の方がボロを出しそうだ。

「サンタ」

その時、ようやく鉄子が俺たちの間に割って入った。

「それ以上言ったらぶん殴るわよ」

「って、俺をかよ!？」

「ぶん」

鉄子にやりこめられた俺を見ると子供は満足そうにうなづく。

鉄子はさらに言語を切り替え、子供を説得しているようだった。

今回の仕事は思っていたより随分面倒な事になりそうだと俺は嘆息する。

しかし、こんな十を少し過ぎた程度の子供が、戦地に赴くのか。

いや、違う。

俺が連れて行くのだ。

「なぜ、哀れむような目で私を見る」

俺の視線がかんに障ったか、子供は挑むような目で再び俺を見る。

「こいつが子供なのよ。ミハイル君」

追い打ちをかけるように鉄子が日本語で俺をおとしめる。

「違う。今そのものは私のことを、心底気の毒そうに見た」

「あー……………気に障ったなら謝る。別に深い意味はねえ」

「貴様は意味もなく、相手を哀れむのか？」

「……………俺の感傷だ。悪かった」

これ以上詮索されないため、謝罪の姿勢を取ったが。

「私は私のことを哀れなどとは思っていない。勝手に見下すな痴れ者」

どうやら日本以外ではあまり通用しないようだ。

っつーか俺は、ガキ相手に何をマジになってるんだか……………。

まあ短い付き合いだ。適当にするさ。

そうして、今回の運びは始まった。

三話目

「なあ、これ空港って書いてあるのか？」

俺は二台目の車の中にあつた地図を指さし、鉄子に問う。

「ええ。お勉強とは精が出るわね」

「知らねえよりは、知つてた方が得だろう」

まあ、そもそも明日には空の上なのだろうが。

「地理も言葉も疎いなど、本当に役立たずだな貴様は」

後部座席でふんぞり返るミハイル。

「彼も必要なのよ」

左ハンドルを華麗に操る女……………鉄子が珍しく助け船を出してくる。

「いざというときの囃に」

「お前、俺の事とことん嫌いなのかな」

軽よりやや大きめの国民車は、道路を快適に駆け抜ける。端々を覆う木々は、俺たちを見下ろすように生い茂っていた。

今は『戦略兵器』であるミハイルを乗せて空港に戻る最中だった。

「あら、この足は誰が調達したんだっけ？」

「やはり役立たずか。まるで迷い子のような」

この銀髪の小僧は、思ったことを全て口に出さないと気が済まないらしい。

と、前方に小さな街が見えてくる。

「お昼にしましょうか」

俺が賛成の意思表示をすると。

「無駄飯喰らいが」

ミハイルのオブラートに包まれていない言葉。

何でそんな言葉まで知ってんだよ。日本人離れた顔立ちで言われると違和感しかわかない。

街の主道から逸れ車は唯一と言っても良さそうなレストランの駐車場へ入る。

車から降りるとそれまで座りっぱなしだったため、腰に手を当て伸びをする。

「あんたいくつよ？」

傍らで両手を上げ伸びをしていた鉄子につっこまれる。

「ほっとけ」

昼時だというのに、駐車場ががらだった。

恐らく地元の人間は皆徒歩で来るのだろう。

そう思っていると新たに車が停まり夫婦らしき人達が出てくる。

「早く、先頼んじやうわよ」

腹が減っていたのだろう、大人げなく一番乗りで店へ入ろうとしていた鉄子。

「何をしている。行くぞ」

意外にも俺の近くで待っていてくれたミハイル君。

律儀な奴なのかも知れない。

しかし俺は夫婦が店の中に入るまでその場に立ち尽くすと、有無を言わずミハイルの白く華奢な手を無理矢理握ると、車に戻ろうとする。

——と、俺の体は宙を舞っていた。

天地が逆転し、コンクリに背中が打ち付けられ、そのまま流れるような動作で路面にうつぶせの状態で組み伏せられる。

鉄子に投げ飛ばされたのだ。

「離してくれると、有り難いんだが」

「何をするつもりだった。答える」

鉄子は力が強いというより、力の使い方が巧らしく、まともに動くことが出来ない。

降ってくる声は今までとは別人に思えた。

いや、違うか。常の冷淡なトーンに、喋り方までが合致したのだ。

それだけで俺の体温は二度ほど下がったかも知れない。

「いや、車に戻ろうとしたただがって、痛っ」

答えに腕の戒めはより強固になった。

「なぜ言葉で伝えないその口は飾りか？」

「普通に車でさっきの場所に戻るぞつつつても、聞かなかっただろ
うよ」

答えに、戒めが緩むことはない。こいつは恐らく何も信頼しない。

ただ自分だけ。自分の決めた基準に当てはまった者を信用するだけなのだ。

だからその基準から僅かでも外れれば今のようにならざるに
出る。

しかし、それならば、なぜ――？

「それで、理由は？」

俺が言いたい台詞を鉄子に言われる。

「今の夫婦の会話聞いてなかったのか？」

要約すれば、空港の警備がやたら厳重だった、とそれだけの話ではある。

「……………なあんだ」

その話の直後、鉄子は俺をあつさりと解放する。

「そうならそう言ってくれば良いじゃない」

声音はやはり冷淡だったが、喋り方は戻っていた。

鉄子は一連の出来事に動揺し、立ちすくんでいたミハイルを安堵させるためか、何事か囁く。

これではどちらが『戦略兵器』なのか分からない。

俺は痛む背中をさすりながら助手席に戻る。

「悪かったわね。報酬、独り占めにされと思ったのよ」

その言葉に俺は特に返さない。

鉄子のあの行動は明らかに異常といえた。あれではまるで……。

「空港には向かわないのか？」

車が走り出すと、ふと、当然の疑問だというように、ミハイル。

「理由は知らねえが、警備が厳重ってことは、つまり今日非番の筈だった探知型第二世代が、シフトに入ってる可能性が大にあるって事だ」

黒田の情報によれば、この国の第二世代はそのまんま『人間』か『戦略兵器』かを見分ける力を持つらしい。

「何とかならないのか」

「簡単に言ってくれるが、夫婦を装うとも、人種の違いで一瞬でも怪しまればそれでアウトだ。第二世代に書類は通じねえからな。んでこの国の土と化すなんて俺はごめんだ」

「サンタの言っていることは正しいのよ。ミハイル君」

「そうか……………」

それに納得したようにミハイルは頷き。

「すまなかった。素人が口を出すべきでなかった」

その唐突な謝罪と賞賛に、俺は後部座席を向いたまま、ミハイル

の顔を凝視する。

てつきり、警備が厳重になることを想定していなかったのかとか、無茶な事を言われるかと思っていたんだが。

「な、何だ？ 私の顔に何かついてるのか？」

「いや、お前意外と良い奴じゃねーか」

俺の口から自然に出てしまった言葉に、ミハイルは、まさしく顔を真っ赤にして怒る。

「目上でもない癖に私を計るな！」

「いや、一応年上だぞ」

「あははははっ。居酒屋でミルク頼む奴が何気取ってんだか」

「今は関係ねえだろ」

それで会話は終わった。

何か、重要な部分で逸らされたが、まあ良いか。

そうして俺たちは、来た道をまっしぐらミハイルを拾った民家に戻る。

「やっぱりパワーが足りないのよね」

扉を再び断続的にノックした後、鉄子はそう言つとどこかへ去つていった。

また調達するつもりなのだろう………車を。

少し溜息をつくのと同時、ここの家主の老婆は、鉄子の信用基準オールAでも出しているのだろうと考える。

でなければ、あんな事後、俺とミハイルを二人だけにしておくわけがない。それともあいつなりに俺に謝罪の気持ちでもあったのだろうか。

「いや、それだけは絶対にない」

「何がだ？」

「特に意味はねえ」

それにしても、扉の前に誰の気配も訪れない。

ミハイルは母国語の独り言をすると、細工の洒落たノブに手をかける。

すると、扉は古めかしい音を立て、あっさり開く。

嫌な予感がした。

俺は意識的にミハイルの前に立ち、中を確認する。

「……………!？」

誰もいないと思った直後、何かに躓き、俺は室内側に転がる。

体を何とか起こしながらミハイルの方を見ると、絶句して腰が抜けたのか玄関に座り込む。

「どうした——？」

ぬるり。

床についた手に、何か粘っこい物が付着する。

それは、血だった。

まだ僅かに暖かさの残る人の血だった。

先ほどまで生きていた筈の老婆の亡骸が転がっていた。

そして、遠くから恐らく警察だろうサイレンの音がした。

「あ、あああああああ」

うめくように母国語を呟くミハイルは、正気を失っている様に見える。

「おい、行くぞ。訳はわからねえが、ここにいればそれだけ面倒な事になる」

「うつうつうつうつ」

しかし、小刻みに震えるミハイルには俺の声は聞こえていないらしい。

「おい！」

サイレンの音が近づく。

ハメられた？

しかし誰に。

あの夫婦が実は鉄子が雇った奴らで、俺は意図的に……………。

いや、今考えても意味がねえ。

俺は先ほど投げられた記憶を頭から振り払うと、血のついていない左手の方でミハイルの手を掴む。

「！ ひっ！！」

ミハイルは驚いた物の、抵抗する力も残っていない様で、俺に引きずられる様に歩き出す。

……………こいつは、本当に『戦略兵器』なのか？ こいつに人が殺せるのだろうか。

——ふと、そんな考えが頭に浮かぶ。

確かにミハイルの肉親だったかも知れない者だ。

だからといって、これから何百何千を殺そうと言う第二世代が、その程度で困惑――。

「そうか」

俺は前に運んだ女のことを思い出す。

困惑するのだ。

錯乱もするのだ。

いくら超能力が使えるようと、彼等は『人間』なのだから。

俺は、そんなことにすら今気がついたのか……………。

俺はミハイルの手をしっかりと握り、急いで逃げ出す。

こんな場所で捕まる訳には行かない。

人気のない所を、つまり町の端を目指し、石畳の道を歩く。

先ほどの死体を見たせいで、古めかしい赤煉瓦の家々を眺めても、どこかおどろおどろしい物にしか見えない。

「あ……………う」

その間もミハイルは、うめき続けた。

「頑張れ」

俺に言える事など、何もない。

ただ、今この瞬間にも崩れそうなミハイルの心を瀬戸際で止めなければならぬ。

しかし、頭の中では自問自答を繰り返す。

こんな繊細な奴が、本当に兵器たり得るのだろうか。

そも、こいつを運ぶのは許されざる犯罪なのではないだろうか。

殺人の斡旋。

例え俺が無事運ばうとも、現地で死ぬ可能性もある。

自殺の斡旋。

「……………頑張れ」

俺は絞り出す様に言う。それは俺自身に言っている言葉かもしれない。なかった。

「気安く言うな……………」

ミハイルの手に力が籠もり、手が離れる。

「何を頑張れと言う！！？ あの人、私のために……………」

ミハイルは自分を責めているのだろう、地面を見つめたまま、続ける。

「私などのために犠牲になった！」

「お前が殺したんじゃないだろ」

「私が殺した様な物だ！！」

「それなら、なおさら頑張れ。あの婆さんの犠牲を無駄にするな」

しかし俺の言葉は逆効果だったか。

「貴様は仕事以外どうでもいいのか」

「ああ、俺はお前を無事に連れ出して……………戦場におくらなけりやならない」

親の仇でも見るように、俺を睨むミハイル。

「それと、ありがとうよ」

「——は？」

ミハイルは、表情を一変させ、呆氣にとられたかのように目を見開く。

「さっき、お前のおかげで、平常心でいられた」

事実、一人で死体など見よう物なら、その場で吐いていたかも知

れない。

「助かった」

「……………ふざけるな」

そつぽを向いて呟くミハイル。

嫌われ過ぎたか。

すると、突然歩道に沿うように、五ドアのスポーツ多目的車が停車する。

「遅せえよ」

俺は空いた窓にそう言った。

「警察がうようよしてたけど、あれ、何？」

運転席から珍しくやや焦った表情の鉄子。

車に乗り込みながらも、事情を説明する。

その間もミハイルは黙ったままだった。

「……………そう」

「おどろかねえんだな、こんな物騒な事になって。それに俺が婆さんを殺したかも疑わない」

「何が言いたいの」

「何を隠してる」

「体重なら教えないわよ」

「話さねーんなら、俺はこの仕事を下りる」

「干されるわよ？ 大体帰り道も分からないでしょ」

「訳もわからん内に殺されてたつてことになるよりはマシだ」

俺は鉄子にただハメられたんだろうか。

そうでないことを願いながら、答えを待つ。

「……………」

鉄子はやや黙考する。それが何よりの答え。

「良い」

どういつ風の吹き回しか、後部座席のミハイルが、先ほどとは異なりしっかりとした口調で会話に割り込んできた。

「ミハイル君」

いさめる様な鉄子の言葉。

しかし、カーブミラー越しにミハイルが、ニット帽を取るのが見

える。

すると、収まっていた銀髪が滑らかに流れ落ちる。

「私の名はジナイダ・アナトリーエブナ・シューキナ。この国の元第一王女だ」

その翠玉のような瞳でまっすぐミラー越しに俺を見ながら、そう言った。

四話目

「いや、流石に信じねえよ。そも女だって事には驚いたが――」

俺はミラー越しに後部座席の銀髪少女見ながら言う。

気がつけば空は曇っていた。

平原に渡された道路を車は延々走る。

時折農家がぼつんとたたずむだけで後は緑が続く。

「私が嘘を言っていると、侮辱するか」

しかしその目は真剣そのもので、これが冗談であれば、かなりの役者だ。

「けどよ……………」

嘘だろう。と言おうとした直後、運転席の鉄子が俺の肩を叩き、首を振る。

前見て運転しろよ……………いや、それはともかく。

「マジで!!!??」

「おおマジよ」

ようやく前を向いた鉄子が即答する。

「そのガキが、じー……………何とかなのか!？」

「ジナイダ・アナトリーエブナ・シューキナだ。私を侮辱する口はこれかっ」

そういつて、背後からによきつと伸びてきた白く小さい手が、俺の頬をつまみ引っ張る。

「痛っ、なにひやがう」

「あはははは。間抜け面にも磨きがかかったわねサンタさん」

艶やかな髪を揺らしながら、笑い涙すら流す鉄子に憎悪の視線を向ける。

しかし、確かに今回の仕事はたった一人を運ぶというのに、随分な報酬であつたのが気にかかっていた。

つまりそういう事なのだろうか。

俺はそれで少し肩の荷が下りた。

「わふい、ほへん」

何とか謝罪すると、渋々といった様子で、じー……………何たらは手を離す。

「お前は最初から知ってたってことか」

「悪かったわ。信用出来るか分からなかったのよ。一応、アンタの噂は黒田に聞いてはいたんだけど」

「それより、面倒なことになったか」

ある事を思い出し、肩の荷が逆に増える。

「って、前見て運転しろっつの」

鉄子はなぜか俺を凝視。

「怒らないの？ 運び屋としての信用に関わる事でしょ」

「はあ？ 何だよ急に」

「いや、だから騙されてたって知って」

いつもならとつくに冷淡な表情に戻っている筈の鉄子は焦った様に言う。

「あー……………そんなことかよ」

頭を掻きながら応える。

「そんなことってアンタ」

「誰かを騙す商売してんだ。騙される覚悟くらい出来てるっつの。まして俺達の商売は国を騙してなんぼだろうが」

いっぱしの運び屋なら誰もがしている覚悟だと、少なくとも俺は

思っているのだが。

「……………意外というか、アンタ凄いわね」

「普通だろ」

「普通の奴なら、キレてる所よ。本当、凄い馬鹿ね。利用しやすい
というか」

鉄子は尚も、独り言のように上の空で続ける。

「思考だだ漏れた阿呆。運転に集中しろっての。事故るぞ」

まあ、付近に他の車は見あたらないため、せいぜい平原につつこ
む程度の事故にしかならないだろうが。

俺は気がつけば右手で頭を掻いていた。

自分語りなんて慣れねえことはするもんじゃねえな。

「で、つまりこの国のお偉いさんの依頼じゃねえってことは、
この国を出るのが一番難しいっつーことだわな」

そうして無理矢理話題を逸らす。

ツッコミが入らないと、ミラーを見ると、じーなんたらはすうす
うと寝息を立てていた。

眠っていれば天使の様というのは、こいつの事を言うのかも知れ
ない。

俺は幾つかの疑問を胸の内にしまい込む。

「そうね…………一度状況を整理するためにも、落ち着くための宿が必要だわ」

「あてがありそうな言い方じゃねえか」

「当然でしょ」

「まあ、こういう状況じゃ一方的に頼るしかねえか」

「その代わり報酬は8：2ね」

「オイ」

「冗談よ。日本を出た後にはたっぷり働いて貰うから」

無表情で茶目っ気を出されても、怖いだけだった。

「んで、お前はそこの眠り姫様の護衛でもやってたのか？」

俺はやや気になっていたことを口に出す。

「まあね」

それに鉄子はあっさりと頷く。

「亡命、ってことで良いのか？」

「まあね。日本を出たら、次は――」

「いや、場所は知らねえ方が良いだろ」

万一俺だけ捕まる様な事があつた時、知っていれば吐かされるだろう。

「……………悪いわね」

「俺も悪人だしな」

そう答えると鉄子は、前を向いたまま僅かに微笑んだ。

途中の街で唯一あるスーパーに停車する。

時間はすでに夕方を過ぎていた。

「ジーナ様とサンタはここで待っていて下さい」

鉄子はそういうと、エンジンかけっぱなしで一人スーパーの中に入っていく。

確かに俺が行こうとも足手まといにしかならない。何せ言葉も文字も分らないのだから。

しかし。

「ん……………」

後部座席で寝ていた姫は、どうやらドアの開閉音で起きたらしく、まぶたをこすりながら上体を起こす。

「じい、は？」

その姿は年齢相応に見えたが、じ……………姫様はすぐに居住まいを正す。

と、与えられた情報故か、まさに王侯貴族といった、超然として何者も寄せ付けぬ凜とした雰囲気圧倒される。

「……………」

「どうした？」

どう答えようかと、思案していると、座席の間からこちらに身を乗り出したジーナ姫様の顔が真ん前に来る。

精密な氷細工の様に整った顔立ちに透き通るような銀髪。

翠玉のような瞳が、くりくりとよく動く。

「いえ、なんでもありません、えーと、姫様」

体温が急激に上がるのを感じながら、なんとかさう言つと、しかし姫様は険しい顔つきになる。

「ジーナで良い。それと喋り方も元に戻せ」

「はあ」

「貴様がそうだと、私が落ち着かない。どちらにしろ私はもう王女では無い」

そう、ジーナはまっすぐな目で言った。

ジーナが身を引つ込めた直後、自然カーナビに目がいく。

「……………！！？」

カーナビは先ほどからニュースを垂れ流していたのだが。

言葉など分らないし、文字も分らない。

しかし、ニュースで流れている画像は、まさしく空港の駐車場にある監視カメラで、そこに映っているのは、まさしく車の鍵を無理矢理開ける鉄子と、俺だった。

さらに画面は変わり、一枚の顔写真。

「……………ソニーヤ……………」

背後で、ジーナが呟くのが聞こえる。

その顔写真は、ジーナをかくまっていた老婆の物だった。

「何があつたか、教えてくれ」

「……………ソニーヤを殺した二人組の映像」

ジーナの震えた声。

「おい、「冗談じゃねえぞ……………」」

その時、運転席のドアが急に開く。

思わず飛び上がるほどに体が反応したが、鉄子の気の抜けた声。

「おまた〜。あら？　もしかしてビビった？　うわ、ださっ」

「……………すぐにこの国からでねえと不味い」

俺は鉄子の軽口を無視、見聞きしたことを話した。

ジーナは、肩を震わせている。よほどショックだったのだろう。

「窃盗に殺人のオマケがついたって？」

「殺人のオマケに窃盗がついたっつー方が正しいだろ」

「あら、昔は盗みを働いただけで右手切り落とされたりもしたのよ」

「いつの時代だっつーの。とにかく今捕まれば——」

「悪くて死刑、良くて死刑ね。この国は今生まれ変わろうと躍起になっているのよ」

「粛正でも流行ってそうだな」

それに鉄子は答えない。

背後でジーナが息をのむ声が聞こえる。

「悪かった」

俺は椅子から乗り出すように振り返ると、なるべく落ち着いた声音で言った。

「お前は必ず無事に届けてやる」

頬の筋肉がこわばり、苦笑いになってしまった。

「——別に恐れてなどいない」

ジーナはそういうとそっぽを向く。

言い返す元気があるのなら大丈夫だろう。

どちらにしろ、車の中で睡眠をとっているのでは披露にも限界が来ると、ある都市へ立ち寄る事になった。

何とというか都市に入ると急に人工物が溢れる様はいつ見ても面白い。

昔やったゲームのように広大で手つかずの大地を行くと、ぽつんと街や村があるような感じが。

先ほど居た町が教会を中心に広がっていたのとは異なり、ある程度の高層ビルも入り交じり、どちらかと言うと日本の大都市とも似ている。

なるほどここならば紛れるには丁度良いだろう。

「こつちよ」

相も変わらずの路駐をすると、鉄子は店と店に挟まれる様にしてある重そうな深緑色をした鉄格子の門の前に立つ。

奥には五階建て程度のマンションがあった。

格子門脇の白壁に呼び鈴らしきボタンが幾つかあったが、俺は字が読めないため、なんと書かれているのかいまいち分からない。

鉄子はその内の一つを押す。

しばらくすると、門の奥重そうな二重硝子の玄関を開け出てきたのは、年配の女だった。

鉄子と女は笑顔で挨拶を交わすと、妙な音がして鉄の門が開く。どうやら自動で開くらしい。

床には赤絨毯、電灯はミニシャンデリアと言った風。

それなりに洒落た建物の口の字型の木製階段をミシリミシリと音

を立てながら上がる。

最上階に到着し、鉄子を先頭にして扉の前に立つ。

音が聞こえて居たのか、特にノックもすることなく扉が開く。

そこに居たのは、百八十は優に越えているだろう金髪の女だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8890k/>

密航 その2

2010年10月22日00時19分発行